

国立民族学博物館の収蔵品④

聖典大聖

世界には、億単位で信者の居る宗教が四つある。キリスト教が最も大きく、次いで、イスラーム教、ヒンドゥー教、仏教と並ぶ。

では、その次に信者数が多い宗教は何だろうか。その辺りから、「宗教」の定義や、信者数の数え方にもよるので、やや悩ましい話が始まる。例えば神道は、文化庁の『宗教年鑑(平成二十九年版)』によれば、八五〇〇万人弱の信者が居るとなっている。ただし、日本の諸宗教信者数の合計が一億八二六万人を突破していて、もはや何を表しているのかが分からない(平成二十九年九月の日本の人口は一億二六六八万人弱)。そもそも、自覚的に神道の「信者」と言う人が、どれだけのいるだろうか。日本人の多くは初詣で神社に行くし、一部の人は神前式で結婚をしもするけれど、一方で寺参りもし、仏壇を拝み、立て箸や箸渡しを忌み、死んだらお寺さんの墓に仏式で埋葬されて成仏するのではないだろうか。



グルドゥアーラー(寺院)の本殿内にて開かれていたグルー・グラント・サーヒブ(ジャンムー・カシミール州スリナガル市、2016年8月、筆者撮影) ※写真中央下に聖典がある

そんな鶴のような数字の神道は措いて、客観的数字で見れば、世界で五番目に大きな宗教と言えば、シク(シク)教である。信者数は二五〇〇万人ほど。インドのパンジャーブ州アマリトサルを中心地とする若い宗教で、十六世紀に誕生した。「イック・オー

アンカール [Ik Oankar]』『一つの創造者』という唯一不二の無形神を信仰するが、これは、他の宗教の神々も本来は全て同じであるという



南アジア展示場のシク教聖典グルー・グラント・サーヒブ [H0200673] (2018年2月、筆者撮影)

べる人は多いだろう。世界中で様々な人がターバンを自由に着用しているが、その中でも、シク教の主流派であるカールサー派の人々は髪を切らず、ターバンで束ねる習慣があるので、飛び切り目立つ。富裕層、エリート層、優秀な商業従事者が多いため、インド国外でも目にする頻度は高い。男性で「シング/シン [Singh]」という名前の付いている人が居たら、シク教徒の可能性が高い。シングとは『獅子』という意味だ。二〇〇四年から一〇年間インドの首相を務めたマンモハン・シンや、プロレスラーとして日本で活躍したタイガー・ジェット・シン(本名ジャグジート・シン・ハンス [Jagjit Singh Hans]) からも、シク教徒である。

発想に基づく。「シク教」と聞いてもピンと来ない日本人は多いかと思うが、ステレオタイプな「インド人」像として、ターバンを巻いた男の人を思い浮か

民博の南アジア展示場に、大層な台の上に置かれ、開かれたページに薄布が掛けられている書籍がある。これがシク教聖典であり、シク教最後の生きているグルー『聖者、尊師』でもある、「グルー・グラント・サーヒブ [Guru Granth Sahib]」(『聖者・聖典・さま』)である。姿形は書籍だが、その実態は第十一代グルーである。そのため、本来、夜は単独でベッドに休められるし、移動時は五人の裸足のシング(教徒)によって運ばれて、日中は風通しの良い寺院本殿の適度に装飾された清潔な玉座の上に単独で横たえられ、シルクの布で覆われる。台座には屋根を付け、その更の上に布製の天蓋も吊るす。何せ、最後の聖者さまなのだ。

なお、「シク [Sikh]」とは『弟子』という意味であり、従って、「シク教」とはグルー『聖者』の弟子たちの宗教であるということの意味している。(吉岡 乾)